

琉球大学学術リポジトリ

児童版失敗観尺度の作成

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2020-10-22 キーワード (Ja): 失敗観, 児童期, 信頼性, 妥当性, 自己知覚 キーワード (En): Beliefs about failure, middle childhood, reliability, validity, self-perception 作成者: 赤嶺, 達也, 中尾, 達馬, Akamine, Tatsuya, Nakao, Tatsuma メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/47085

児童版失敗観尺度の作成

赤嶺達也¹ (浦添市立牧港小学校)・中尾達馬 (琉球大学教育学部)

本研究の目的は、大学生を対象に開発された失敗観尺度 (池田・三沢, 2012) の児童版を作成し、その信頼性と妥当性を確認することであった。調査対象児は、沖縄県にある公立 A 小学校に通う小学 4 - 6 年生 330 名 (平均年齢 11.0 歳、男児 154 名、女児 175 名、性別不明 1 名) であった。探索的因子分析の結果、池田・三沢 (2012) と同様に、「失敗のネガティブ感情価」「失敗からの学習可能性」「失敗回避欲求」「失敗の発生可能性」という 4 因子を抽出することができた。本研究では、これら 4 因子の信頼性と妥当性に関して、(1) 内的整合性、(2) 再検査信頼性、(3) 自己知覚尺度との関連性を検討した。その結果、児童版失敗観尺度は一定程度の心理測定的属性 (信頼性と妥当性) を備えた尺度であることが示唆された。

キーワード：失敗観、児童期、信頼性、妥当性、自己知覚

Constructing the self-report scale of beliefs about failure for children

Tatsuya Akamine and Tatsuma Nakao

This study adapted the self-report scale of beliefs about failure for university students (Ikeda & Misawa, 2012) into school-aged children, and examined its reliability and validity. Participants were 330 elementary school students in Grade 4-6 (mean age = 11.0 years; 154 boys, 175 girls, and 1 gender unknown). As a result of exploratory factor analysis, we could find 4 factors (negative affective valence of failure, learning orientation, need to avoid failure, and perceived probability of occurrence of failure) like Ikeda & Misawa (2012). We examined the subscales' (1) internal consistency, (2) test-retest reliability, and (3) correlation coefficient with self-perception scale. The new scale for children appeared to have adequate psychometric properties of reliability and validity.

Key words: Beliefs about failure, middle childhood, reliability, validity, self-perception

問題と目的

私たちは、日常生活を送る中で様々な課題に取り組み、その結果として成功あるいは失敗という事態に直面する。失敗の持つ動機づけの低下、無力感、抑うつ症状などのネガティブな効果を最小

限に抑制し、学習や成長につながるポジティブな効果を最大限に引き出すことは、教育上、非常に重要な課題の 1 つである (池田・三沢, 2012)。そこで池田・三沢 (2012) は、「失敗観」(beliefs about failure) を「失敗に対する捉え方や価値観」(p. 368) と定義し、失敗に関する先行研究の文

¹ 本研究は、第一著者が 2020 年 3 月に琉球大学大学院教育学研究科へ提出した修士論文の一部を再分析・加筆・修正したものです。調査にご協力くださいました校長先生をはじめとする諸先生方、そして子どもたちへ、この場を借りて謝意を表します。また、失敗観尺度の児童版作成を快く許可して下さいました原著者の池田 浩先生 (九州大学) と三沢 良先生 (岡山大学) に感謝申し上げます。

献レビューを通して、失敗には、(1)可能な限り未然に失敗を防ぐことを目指した研究群と、(2)失敗が生じた後で、それを今後いかに活用するのかに焦点を当てた研究群の2つが存在することを指摘した。そして彼らは、大学生を対象に、「失敗に対する価値観を測定する一般的で包括的な測定」(池田・三沢, 2012, p. 376)を開発し、その信頼性と妥当性を検討した。その結果、(1)失敗観は、「失敗のネガティブ感情価」(negative affective valence of failure)、「失敗からの学習可能性」(learning orientation)、「失敗回避欲求」(need to avoid failure)、「失敗の発生可能性」(perceived probability of occurrence of failure)という4つの因子から構成されること、開発された失敗観尺度には、(2)内的整合性や再検査信頼性という点で十分な信頼性が、(3)自己効力感、特性不安、達成動機、完全主義、自尊感情、楽観主義との関連性という点で十分な妥当性があることが実証的に明らかになった。

しかし、児童期については、子どもの持つ失敗観を包括的に測定できる自己報告式尺度は未だに開発されていない²。児童期は、自分自身の能力(competence)と向き合う時期であり(Sroufe, Egeland, Carlson, & Collins, 2005)、学年進行に伴い、自尊感情や学習動機づけが低下することが明らかになっている(伊藤, 2008; 藪, 1992)。そのため、児童の持つ失敗観を適切に把握し、子どもたちがそのような失敗観を持つようになる背景やその発達の帰結について、理論的・実証的な検討を重ねていくことは、教育上、非常に重要であると著者らは考えた。

そこで本研究の目的は、池田・三沢(2012)の失敗観尺度の児童版を作成し、その信頼性と妥当性を確認することであった。信頼性については、池田・三沢(2012)と同様に、内的整合性(α 係数)と再検査信頼性(2ヶ月、6ヶ月、8ヶ月)について検討を行う。また、妥当性については、改訂・

自己知覚尺度児童版(眞榮城・菅原・酒井・菅原, 2007)を同時に実施し、失敗観尺度の4因子と改訂・自己知覚尺度における「学業能力評価」「運動能力評価」「容姿評価」「友人関係評価」「道徳性評価」「全体的自己価値感」との関連性を検討する。

池田・三沢(2012)の研究2($N=702$)においては、内的整合性(α 係数)は、失敗のネガティブ感情価 = .88、失敗からの学習可能性 = .86、失敗回避欲求 = .81、失敗の発生可能性 = .76であった。また、3ヶ月弱という期間における再検査信頼性($N=93$)は、失敗のネガティブ感情価 = .74、失敗からの学習可能性 = .66、失敗回避欲求 = .62、失敗の発生可能性 = .51であった。さらに、ローゼンバーグの自尊感情尺度(山本・松井・山城, 1982)との相関($N=100$)は、失敗のネガティブ感情価 = -.41 ($p<.01$)、失敗からの学習可能性 = .05 ($n.s.$)、失敗回避欲求 = -.18 ($p<.10$)、失敗の発生可能性 = -.05 ($n.s.$)であったが、自己効力感尺度との相関($N=295$)は、失敗のネガティブ感情価 = -.37 ($p<.01$)、失敗からの学習可能性 = .42 ($p<.01$)、失敗回避欲求 = -.26 ($p<.01$)、失敗の発生可能性 = .03 ($n.s.$)であった。

したがって、本研究においては、児童版失敗観尺度の信頼性については、池田・三沢(2012)と同様に、 α 係数は.76-.88という値を(予測1)、再検査信頼性については、失敗の発生可能性は.50程度とやや低いものの、それ以外の3因子については.60-.70程度の値を予測する(予測2)。児童版失敗観尺度の妥当性については、池田・三沢(2012)における失敗観と自己効力感との相関関係を参考にすれば、改訂・自己知覚尺度児童版の各下位尺度との間で、相関係数の大きさは絶対値で|.25|以上で、「失敗からの学習可能性」は有意な正の相関があり、「失敗のネガティブ感情価」「失敗からの学習可能性」「失敗回避欲求」は有意な負の相関があり、「失敗の発生可能性」

² 西村・瀬尾・植阪・マニユエル・田中・市川(2017)は、中学生を対象に、(a)問題失敗場面、(b)発言失敗場面、(c)テスト失敗場面、(d)受験失敗場面という学習場面における失敗観を測定するために、「失敗に対する活用可能性の認知」「失敗に対する脅威性の認知」という2因子から構成される「学習場面に対する失敗観尺度」を開発した。池田・三沢(2012)の尺度がボトムアップアプローチによる幅広い領域を念頭においた尺度であるのに対して、西村他(2017)の尺度はトップダウンアプローチによる学習場面に特化した教育的視点に基づく尺度であり、「失敗を経験した後の学習につながるかどうか、および、教育上、子どもに身につけさせたい価値観か否かという視点」(西村他, 2017, p. 199)から、2つの失敗観に焦点を当てた尺度である。本研究において池田・三沢(2012)の失敗観尺度の児童版が作成されることで、小学生や中学生に対しても、場面を限定しないより幅広い領域と特定の学習場面の両方において失敗観の測定が可能となり、研究目的に合わせた尺度の使い分けが可能になると考えられる。

は有意な相関が得られないか得られたとしてもその値はかなり小さいと予測する（予測3）。

方法

調査対象児 調査対象児は、沖縄県にある公立A小学校に通う小学4年生から6年生の計330名（平均年齢11.0歳、男児154名、女児175名、性別不明1名）であった。内訳は、小学4年生105名（平均年齢9.9歳、男児49名、女児56名）、小学5年生108名（平均年齢10.9歳、男児52名、女児56名）、小学6年生117名（平均年齢12.0歳、男児53名、女児63名、性別不明1名）であった。

質問紙 質問紙は、フェイスシート（学年、クラス、出席番号、年齢、性別）と以下の2つの尺度から構成された。

児童版失敗観尺度 児童の失敗観を測定するために、池田・三沢（2012）が大学生を対象に開発した「失敗観尺度」に基づき、現職の小学校教諭である第一著者（教職歴11年）と児童に対する自記式尺度の開発の経験が豊かな発達心理学者である第二著者が、項目の内容的妥当性、児童が項目内容を明確に理解できるかどうかなどを議論しながら、「失敗のネガティブ感情値」「失敗からの学習可能性」「失敗回避欲求」「失敗の発生可能性」それぞれについて5項目ずつ計20項目を作成した。教示は「下の文章を読んで、自分の気持ちや考えに近い数字に1つ○をつけてください。」とし、回答は、4段階（1＝「そう思わない」、2＝「どちらかといえば そう思わない」、3＝「どちらかといえば そう思う」、4＝「そう思う」）で求めた。

改訂・自己知覚尺度児童版 児童の持つ自己知覚を測定するために、改訂・自己知覚尺度児童版（眞榮城他、2007）を実施した。改訂・自己知覚尺度児童版は、「学業能力評価」（Scholastic Competence）、「運動能力評価」（Athletic Competence）、「容姿評価」（Physical Appearance）、「友人関係評価」

（Social Acceptance）、「道徳性評価」（Behavior Conduct）、「全体的自己価値感」（Global Self Worth）という6因子36項目（各因子6項目ずつ）から構成されており、回答は、4段階（1＝「あてはまらない」から4＝「あてはまる」）で求めた。なお、「全体的自己価値観」は、他の5側面の上位概念として位置づけられており（眞榮城、2005）、「全体的自尊感情に類似したもの」（analogous to overall self-esteem, Harter, 2012, p. 2）だと考えられている。

手続き 学校長の許可を得た上で、第一著者が学級担任に依頼をし、2019年2月に調査を実施して貰った。質問紙の表紙には、研究の目的並びに回答者のプライバシーの保護、注意事項などを明記し、さらに、調査実施者の学級担任から、質問紙への回答は自由意志であること、結果は研究以外の目的では使用しないこと、データは統計的に処理しプライバシーが侵害されることはないこと、などを説明して貰った。なお、児童版失敗観尺度の再検査信頼性の検討については、2019年2月に4年生であった児童101名に対して、5年生になった2019年4月に再度調査を実施した（期間は2ヶ月）。さらに、このうちの50名については、2019年10月にも、再度調査を実施した³。

結果と考察

探索的因子分析、内的整合性 児童版失敗観尺度の20項目について、最小2乗法・プロマックス回転による因子分析を行った。固有値が、第1因子から順に、4.81、2.48、1.46、1.17、0.73、0.66、0.55、0.51と推移していたため、4因子解が適当であると判断した。解釈可能性と因子負荷量がいずれかの因子に.40以上であるという基準から項目の選択を行ったところ、最終的には15項目が残った（Table 1）。4因子による累積説明率は54.25%であった。池田・三沢（2012）に従い、第1因子を「失敗からの学習可能性」、

³ 本論文は、赤嶺（2020）の一部を再分析・加筆・修正したものである。赤嶺（2020）では、2019年2月に4年生であった児童が、5年生に進級した後、5月から10月にかけて、4クラス中2クラスを実験群、残りの2クラスを統制群として、自尊感情を高める介入を行った。そのため、本研究では、再検査信頼性（2ヶ月）についてはN=101の結果を記載しているが、再検査信頼性（4ヶ月、6ヶ月）については、統制群50名の結果を記載した（Table 5）。なお、実験群のみ、あるいは実験群も含めた全体における再検査信頼性（4ヶ月、6ヶ月）についても、Table 5と類似した結果が得られた。

第2因子を「失敗のネガティブ感情価」、第3因子を「失敗回避欲求」、第4因子を「失敗の発生可能性」と命名した。 $\alpha = .69 - .87$ であり (Table 1)、池田・三沢 (2012) と同様に、一定程度の

内的整合性 (信頼性) が得られたので、予測1は支持された。因子間相関についても、池田・三沢 (2012) と同様の方向性での相関が得られた⁴。

Table 1 児童版失敗観尺度の因子分析結果 (N=318)

項目	F1	F2	F3	F4	M	SD
F1: 失敗からの学習可能性, $\alpha = .87$, M (SD) = 3.29 (0.76)						
16. 失敗が新たな学びにつながると思う。	.89	.02	.03	-.08	3.43	0.89
7. 失敗とは、自分のことを見直すよい機会である。	.79	.08	.01	-.03	3.21	0.93
19. 失敗を乗り越えることで、成長することができる。	.76	.03	-.02	.07	3.47	0.86
6. 失敗をすることで心が強くなれると思う。	.67	-.08	.03	-.01	2.95	1.07
3. 失敗とは、成長するための最大のチャンスだ。	.66	-.03	-.03	.14	3.39	0.90
F2: 失敗のネガティブ感情価, $\alpha = .81$, M (SD) = 2.59 (0.85)						
5. 失敗すると、私はがっかりしてしまう。	.12	.84	-.09	-.06	2.96	1.07
4. 失敗したことを、私は後々まで気にしてしまう。	.01	.84	-.09	-.05	2.82	1.06
8. 失敗すると、自信を失ってしまう。	-.11	.59	.14	.05	2.40	1.13
18. 失敗すると、しばらくは立ち直れない。	-.10	.48	.24	.07	2.19	1.03
F3: 失敗回避欲求, $\alpha = .75$, M (SD) = 1.87 (0.84)						
9. 失敗とは、決して許されないことだ。	.05	.01	.79	-.01	1.91	1.07
12. 失敗とは、情けないことである。	.00	.07	.73	.03	1.99	1.03
20. 失敗とは、あってはならないことだ。	-.01	-.10	.64	-.04	1.72	1.00
F4: 失敗の発生可能性, $\alpha = .69$, M (SD) = 3.42 (0.67)						
11. 失敗とは、気をつけていても起こるものだ。	-.03	.08	-.15	.80	3.47	0.85
14. 失敗とは、どんなに自信があっても起こしてしまうものだ。	.02	-.07	.15	.73	3.34	0.91
15. 失敗とは、よくあることだ。	.06	-.06	-.03	.46	3.47	0.78
因子間相関						
	F1	F2	F3	F4		
F1	-	-.31	-.54	.27		
F2	-	-	.53	.16		
F3	-	-	-	-.11		

注) 削除された5項目は、以下の通りであった: 1. 失敗とは、取り返しのつかないことだ。2. 失敗とは、避けられないものである。10. 失敗とは、つらい経験である。13. 失敗とは、周りから責められるものである。17. 失敗とは、当たり前になってしまうものだ。

性差および学年差 失敗観における性差や学年進行による量的変化を明らかにするために、児童版失敗観尺度の各下位尺度得点 (加算平均値) に対して、2 (性別: 男児、女児) × 3 (学年: 4年生、5年生、6年生) の2要因分散分析を行った。なお、これら2因子は、調査対象者間要因であった。その結果、「ネガティブ感情価」において、性別の主効果が有意であり、女児は、男児に比べて、「ネ

ガティブ感情価」の得点が有意に高いことが示された (Table 2)。

妥当性 改訂・自己知覚尺度児童版の各下位尺度得点 (加算平均値) を眞榮城他 (2007) に従い算出した (Table 3、改訂・自己知覚尺度における性差や学年進行による量的変化については、付録を参照のこと)。そして、児童版失敗観尺度と改訂・自己知覚尺度の各下位尺度得点間の相

⁴ 池田・三沢 (2012) の研究2では、因子間の相関は、失敗のネガティブ感情価と失敗からの学習可能性 = -.12、失敗のネガティブ感情価と失敗回避欲求 = .51、失敗のネガティブ感情価と失敗の発生可能性 = .10、失敗からの学習可能性と失敗回避欲求 = -.40、失敗からの学習可能性と失敗の発生可能性 = .32、失敗回避欲求と失敗の発生可能性 = -.15であった。

Table 2 児童版失敗観尺度における性差および学年差

下位尺度名	男児	女児	4年生	5年生	6年生	F 値、 η_p^2 ①性別の主効果、②学年の主効果、 ③性別 × 学年の交互作用
	N=154 M (SD)	N=175 M (SD)	N=105 M (SD)	N=108 M (SD)	N=116 M (SD)	
失敗からの 学習可能性	3.31 (0.77)	3.27 (0.75)	3.26 (0.80)	3.32 (0.68)	3.27 (0.80)	①F (1, 323) =0.17, η_p^2 =.00 ②F (2, 323) =0.21, η_p^2 =.00 ③F (2, 323) =0.39, η_p^2 =.00
失敗のネガティ ブ感情価	2.44 (0.88)	2.73 (0.81)	2.47 (0.91)	2.65 (0.76)	2.65 (0.87)	①F (1, 323) =9.64**, η_p^2 =.03 ②F (2, 323) =1.72, η_p^2 =.01 ③F (2, 323) =1.29, η_p^2 =.01
失敗回避欲求	1.83 (0.85)	1.92 (0.83)	1.91 (0.88)	1.84 (0.76)	1.87 (0.89)	①F (1, 323) =0.94, η_p^2 =.00 ②F (2, 323) =0.12, η_p^2 =.00 ③F (2, 323) =2.55, η_p^2 =.02
失敗の発生可能性	3.46 (0.69)	3.39 (0.65)	3.38 (0.73)	3.39 (0.67)	3.50 (0.61)	①F (1, 323) =0.80, η_p^2 =.00 ②F (2, 323) =1.26, η_p^2 =.01 ③F (2, 323) =0.02, η_p^2 =.00

注) * p <.05, ** p <.01

関係数を算出した結果、池田・三沢 (2012) の結果に比べると相関値の大きさはやや小さいものの、彼らの結果と同じく、改訂・自己知覚尺度の各下位尺度の得点は「失敗からの学習可能性」との間で有意な正の相関が、「失敗のネガティブ感情価」「失敗回避欲求」との間で有意な負の相関

が得られたが、「失敗の発生可能性」については有意な相関が得られなかった。検討した 18 個の相関係数中 7 個 (38.9%) では相関値の大きさの絶対値が |.25| を下回ってはいたが、それら 18 個の相関係数は全て有意であったため、予測 3 は概ね支持されたと考えられる。

Table 3 児童版失敗観尺度と改訂・自己知覚尺度との相関 (N=330)

	α 係数	M (SD)	児童版失敗観尺度			
			失敗からの 学習可能性	失敗のネガ ティブ感情価	失敗回避 欲求	失敗の発生 可能性
改訂・自己知覚尺度						
学業能力評価	0.74	2.65 (0.65)	.25**	-.17**	-.27**	.04
運動能力評価	0.80	2.37 (0.72)	.23**	-.27**	-.20**	.09
容姿評価	0.76	2.49 (0.67)	.28**	-.29**	-.24**	-.03
友人関係評価	0.58	2.85 (0.61)	.27**	-.21**	-.25**	.06
道徳性評価	0.64	2.52 (0.53)	.30**	-.13*	-.22**	-.08
全体的自己価値感	0.74	2.66 (0.66)	.31**	-.28**	-.29**	.01

注 1) * p <.05, ** p <.01

注 2) 「友人関係評価」については、本研究では 6 項目の α 係数が 0.43 と低かったため、中尾・村上 (2016) と同様に、項目 14 と項目 26 を削除した 4 項目の加算平均値を尺度得点とした。

再検査信頼性 児童版失敗観尺度の再検査信頼性 (2ヶ月、6ヶ月、8ヶ月) の結果を Table 4 と Table 5 に示した。新学期を挟んだ結果 (Table 4、Table 5 左側) については、必ずしも十分な再検査信頼性は得られなかったが、新学期を挟まない結果 (Table 5 右側) については、池田・三沢 (2012) と同様の再検査信頼性が得られたので、

予測 2 は概ね支持されたと見える。

今後の課題 予測 1 は支持され、予測 2 と予測 3 は概ね支持されたので、本研究で作成した 4 因子から構成される児童版失敗観尺度には、一定程度の (やや低い許容できる範囲の) 信頼性と妥当性があることが確認されたと見える。今後は、児童の失敗観の連続性・変容を支えるメカニズム、

Table 4 児童版失敗観尺度の再検査信頼性 1 (2 ヶ月、N=101)

		2019 年 2 月			
		失敗からの 学習可能性	失敗のネガ ティブ感情価	失敗回避 欲求	失敗の発生 可能性
2019 年	失敗からの学習可能性	.44**	-.02	-.21*	.30**
4 月	失敗のネガティブ感情値	-.23*	.55**	.30**	.00
	失敗回避欲求	-.32**	.30**	.49**	-.10
	失敗の発生可能性	.08	.03	-.13	.34**

注 1) * $p < .05$, ** $p < .01$

Table 5 児童版失敗観尺度の再検査信頼性 2 (6 ヶ月、8 ヶ月、N=50)

		2019 年 2 月				2019 年 4 月			
		失敗からの 学習可能性	失敗のネガ ティブ感情価	失敗回避 欲求	失敗の発生 可能性	失敗からの 学習可能性	失敗のネガ ティブ感情価	失敗回避 欲求	失敗の発生 可能性
2019 年	失敗からの学習可能性	.60**	-.11	-.27	.34*	.76**	-.30*	-.43**	.25
10 月	失敗のネガティブ感情値	-.30*	.69**	.38**	-.05	-.24	.77**	.45**	.20
	失敗回避欲求	-.63**	.43**	.49**	-.31*	-.58**	.42**	.65**	-.07
	失敗の発生可能性	.28*	-.05	-.13	.03	.47**	-.09	-.11	.47**

注 1) * $p < .05$, ** $p < .01$

発達の軌跡、そして発達の帰結への影響についてさらなる研究が望まれる。特に、本研究においては、新学期を挟んだ場合には、そうでない場合に比べて、児童の失敗観の変化可能性が高まることが示唆されたので、学期の区切れ目の持つ良さ(あるいは、失敗観に対する環境要因・文脈要因の持つ意味)については、今後もさらなる検討が必要であろう。

引用文献

- 赤嶺達也 (2020). がんばったことを褒められれば、自尊感情は高まるのか? — 沖縄県公立小学校における実践を通して — 琉球大学教育学研究科修士論文 (未公開).
- Harter, S. (2012). *Self-perception profile for children: Manual and questionnaires (grades 3-8)*. University of Denver. Retrieved from <https://portfolio.du.edu/SusanHarter/page/44210> (2020 年 3 月 10 日)
- 池田 浩・三沢 良 (2012). 失敗に対する価値観の構造——失敗観尺度の開発—— 教育心理学研究, 60, 367-379.
- 伊藤忠弘 (2008). 児童期の動機づけ 上淵 寿 (編) 感情と動機づけの発達心理学 (pp. 125-148) ナカニシヤ出版
- 眞榮城和美 (2005). 自己評価に関する発達心理学的研究——児童期から青年期までの検討—— 風間書房
- 眞榮城和美・菅原ますみ・酒井 厚・菅原健介 (2007). 改訂・自己知覚尺度日本語版の作成——児童版・青年版・大学生版を対象として—— 心理学研究, 78, 182-188.
- 中尾達馬・村上達也 (2016). 児童期中期におけるアタッチメントの安定性を測定する試み——カーンズ・セキュリティ・スケール (KSS) の日本語版作成—— 発達心理学研究, 27, 72-82.
- 西村多久磨・瀬尾美紀子・植阪友理・マナロ マニュエル・田中瑛津子・市川伸一 (2017). 学業場面に対する失敗観尺度の作成 教育心理学研究, 65, 197-210.
- 蘭 千尋 (1992). セルフ・エスティームの形成と学校の影響 遠藤辰雄・井上祥治・蘭 千尋 (編) セルフ・エスティームの心理学——自己価値の探求—— (pp. 178-199) ナカニシヤ出版
- Sroufe, L. A., Egeland, B., Carlson, E. A., & Collins, W. A. (2005). *The development of the person: The Minnesota study of risk and adaptation*

from birth to adulthood. New York: Guilford Press.

山本真理子・松井 豊・山城由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

付録

改訂・自己知覚尺度児童版における性差や学年進行による量的変化を明らかにするために、各下位尺度得点(加算平均値)に対して、2(性別: 男児、女児)×3(学年: 4年生、5年生、6年生)の2要因分散分析を行った(Table A)。なお、これら2要因は、調査対象者間要因であった。

有意であった主効果に対する下位検定(多重比較はTukeyのHSD検定)の結果、以下の4点が示された。すなわち、(1)「学業能力評価」においては、4年生や5年生は、6年生に比べて、得点が有意に高く、(2)「運動能力評価」においては、男児は、女児に比べて、また、4年生は、6年生に比べて、得点が有意に高く、(3)「友人関係評価」においては、男児は、女児に比べて、

得点が有意に高く、(4)「道徳性評価」においては、女児は、男児に比べて得点が有意に高かった。

有意であった交互作用に対する下位検定(多重比較はTukeyのHSD検定)の結果、以下の3点が示された。すなわち、(1)「学業能力評価」においては、女児における学年の単純主効果が有意であり($F(2, 323) = 6.11, p < .01, \eta_p^2 = .04$)、女児においては、5年生は、6年生に比べて、得点が有意に高かった。(2)「容姿評価」においては、6年生における性別の単純主効果が有意であり($F(1, 323) = 8.06, p < .01, \eta_p^2 = .02$)、6年生においては、男児は、女児に比べて、得点が有意に高く、さらに、女児における学年の単純主効果も有意で($F(2, 323) = 4.87, p < .01, \eta_p^2 = .03$)、女児においては、5年生は、6年生に比べて、得点が有意に高かった。(3)「道徳性評価」においては、4年生における性別の単純主効果が有意で($F(1, 323) = 15.33, p < .01, \eta_p^2 = .05$)、4年生においては、女児は、男児に比べて得点が有意に高く、さらに、女児における学年の単純主効果も有意で($F(2, 323) = 5.20, p < .01, \eta_p^2 = .03$)、女児においては、4年生は、6年生に比べて、得点が有意に高かった。

Table A 改訂・自己知覚尺度の各下位尺度得点を従属変数とした2(性別: 男児、女児)×3(学年: 4年生、5年生、6年生)の分散分析および下位検定結果

	男児				女児				F値、 η_p^2	
	4年生	5年生	6年生	全体	4年生	5年生	6年生	全体		
	N	49	52	53	154	56	56	63	175	①性別の主効果
学業能力評価	M	2.85	2.60	2.56	2.67	2.66	2.83	2.43	2.63	②学年の主効果
	(SD)	(0.72)	(0.66)	(0.62)	(0.68)	(0.62)	(0.55)	(0.63)	(0.62)	③性別×学年の交互作用
運動能力評価	M	2.69	2.50	2.53	2.57	2.36	2.24	2.02	2.20	①F(1, 323) = 0.18, $\eta_p^2 = .00$
	(SD)	(0.75)	(0.57)	(0.72)	(0.68)	(0.78)	(0.67)	(0.65)	(0.71)	②F(2, 323) = 5.56**, $\eta_p^2 = .03$
容姿評価	M	2.44	2.60	2.58	2.54	2.51	2.59	2.23	2.44	③F(2, 323) = 3.50*, $\eta_p^2 = .02$
	(SD)	(0.65)	(0.59)	(0.63)	(0.62)	(0.70)	(0.64)	(0.71)	(0.70)	①F(1, 323) = 23.03**, $\eta_p^2 = .07$
友人関係評価	M	2.93	2.93	2.94	2.94	2.82	2.80	2.74	2.78	②F(2, 323) = 3.44*, $\eta_p^2 = .02$
	(SD)	(0.59)	(0.56)	(0.62)	(0.59)	(0.69)	(0.55)	(0.63)	(0.62)	③F(2, 323) = 0.95, $\eta_p^2 = .01$
道徳性評価	M	2.38	2.43	2.43	2.41	2.78	2.59	2.47	2.61	①F(1, 323) = 1.75, $\eta_p^2 = .01$
	(SD)	(0.60)	(0.53)	(0.48)	(0.54)	(0.47)	(0.43)	(0.55)	(0.50)	②F(2, 323) = 2.35, $\eta_p^2 = .01$
全体的自己価値感	M	2.71	2.71	2.58	2.67	2.66	2.80	2.51	2.65	③F(2, 323) = 3.17*, $\eta_p^2 = .02$
	(SD)	(0.65)	(0.65)	(0.67)	(0.66)	(0.65)	(0.67)	(0.63)	(0.66)	①F(1, 323) = 4.92*, $\eta_p^2 = .02$
										②F(2, 323) = 0.08, $\eta_p^2 = .00$
										③F(2, 323) = 0.17, $\eta_p^2 = .00$
										①F(1, 323) = 12.47**, $\eta_p^2 = .04$
										②F(2, 323) = 1.71, $\eta_p^2 = .01$
										③F(2, 323) = 3.24*, $\eta_p^2 = .02$
										①F(1, 323) = 0.03, $\eta_p^2 = .00$
										②F(2, 323) = 2.92, $\eta_p^2 = .02$
										③F(2, 323) = 0.49, $\eta_p^2 = .00$

注1) * $p < .05$, ** $p < .01$